様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6　日現在

機関番号：23901
研究種目：基盤研究 C
研究期間：2010～2012
課題番号：22520647
研究課題名（和文）在中国日本関連遺跡及び記念物の基礎研究―中国における日本イメージの形成をめぐって
研究課題名（英文）　Basic Research on Japanese Relics and Memorials in China: Focusing on the Formation of Japanese Impression in China
研究代表者
王　暁葵（WANG XIAOKUI）
愛知県立大学・外国語学部　非常勤講師
研究者番号：80423846

研究成果の概要（和文）：
本研究は、中国における日本関連の遺跡及び記念物の調査を通して、中国の日本に対する記憶とイメージの形成において、記憶の表象物としての役割を明らかにするものである。
具体的には、南京・広東・広西などを調査対象地域にして、文献調査・フィールドワークなどの手法を取り、南京大虐殺記念館・広西桂林の月嶺村などの日本関連の遺跡や記念物の現状及び変遷について包括的に調査を行った。これによって、現在の中国人の日本に対する記憶の特徴を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research is to show the effect of representative materials on historical memories such as relics and memorials in the process of forming Chinese People's Japanese impression through researches on related Japanese relics and memorials in China. Taking Nanjing, Guangdong and Guangxi as research areas, and using methods of literature research, fieldwork and interviews, overall investigation on recent situation and historical evolution about Japanese relics, memorials in the Memorial Hall of the Victims in Nanjing Massacre by Japanese Invaders and Yueling Village in Guilin, Guangxi Province, are done to show the features of Japanese memories for Chinese people.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：史学一般
科研費の分科・細目：歴史学
キーワード：　戦争遺跡、記念碑、日本人イメージ　南京大虐殺、戦争記憶、広西戦、メモリアル、

１．研究開始当初の背景

20 世紀末から 21 世紀初めの数十年において、文化的な生産活動としての記念・顕彰行為の歴史的研究が注目を集めている。特に公的記憶の形成については、記念碑・記念館・博物館・記念日・記念・追悼儀式などの役割

が、「国民」を作り上げる装置として、分析の対象となった。この観点によれば、記念碑などは単なる過去の出来事の記録装置ではなく、政治的・文化的「伝達装置」でもあると考えられている。アメリカ史の研究者である和田光弘氏の指摘によれば、「記念碑などが、公的記憶の結節点・表出点であると同時に、公的記憶を再生産・変容させる仕組として存在している。そしてそこでは記念日を中心とする記念行事など、さまざまな記念・顕彰行為が執行されているのである。したがって、このような記念・顕彰行為や記念碑そのものの分析を通じて、ある特定の歴史事象に対する人々の意識の変化、記憶の形成過程を広く読み解くことが可能となる」。(『近代化プロセスにおける家族と郷土の比較文化史』研究報告書　平成 16 年 3 月)

このような認識に基づき、アメリカ・ドイツ・日本などの戦争記念碑・墓碑・石造物などの調査と分析が大いに進められた。日本においては、平成 15 年 3 月、国立歴史民俗博物館による『近現代の戦争に関する記念碑』調査報告書が公表され、日本全国の近現代戦争に関する記念碑の全貌が明らかになった。

また学界では、歴史学・宗教社会学・民俗学・政治学など様々な学問的アプローチから記念物の分析が行われた。

しかしながら、中国では上述の問題意識に基づいた石造記念物などを記憶の表象物として分析する研究は未だ行われていない。特に日本人イメージの形成における記念物の役割の分析は、日本と中国の相互イメージの形成において、現実的な意義をも有する重要なものと思われる。

２．研究の目的

中国には、多くの日本関連の遺跡・記念物が存在している。たとえば、北京郊外の盧溝橋にある「中国人民抗日戦争記念館・碑林」、南京の「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」、1976 年 7 月の河北省唐山市で起きた大地震の日本人犠牲者（日立製作所技術者）のために立てられた記念碑などである。

これらの記念物は、日中戦争という不幸な歴史の記憶を喚起するものもあれば、日中文化交流や民間往来を記念するものもある。こうした記念物はほぼ中国全土に見られ、歴史資料としての役割を果たす一方で、ナショナリズムへの流用、地域社会の団結や個人の顕彰など様々な観点で利用されている。また、学校教育の一環として、生徒が定期的に指定された遺跡・記念物で記念行事を行い、また、愛国主義教育基地に指定された博物館・記念館などの施設を見学することも義務化されている。これらの歴史認識や評価の表象として構築された記念碑・記念館などの空間において行われる追悼の儀式によって、日本に関する記憶が再生産され、それらは日本イメージの形成に大きな役割を果している。本研究は、こうした中国における日本・日本人の記憶とイメージの形成及びその歴史的変遷のメカニズムを明らかにしたい。

具体的には、重点的に調査する地域を選定し、上述の記念物の建設の経緯、歴史的変遷、現存の状況及び関連する記念行為の実態を調査し、記念碑を中心として構築された記念空間が、中国の近代における公の記憶の形成において果たした役割の分析を目的とした。

３．研究の方法

本研究は、中国各地に点在する日本関係の遺跡・記念物の全貌を明らかにすることを念頭におき、まず広東、広西、南京地区を中心に、文献調査とフィールドワークによって、基礎データの収集・整理を行った。さらに各地の図書館、資料館、博物館および現地調査を通じて、新たな資料を発掘しつつ、この課題にアプローチした。

次に、重点地域を絞って、聞き取り調査を行い、日本関連の遺跡や記念物と地元の人々の生活との関わりについて調査する。また、一部の記念館や記念物に見学者の人数の推移、展示内容の変遷、増改築の経緯、記念行事などを調べ、その政治的・社会的背景に合わせ、イメージの形成及び記憶の構築における記憶物の役割について分析する。

４．研究成果

三年間の調査研究で、6 本の雑誌論文、一冊の著作、９回の学会報告をし、以下の成果を得ることができた。

１．中国における日本に対する認識は、さまざまな国内外の状況に合わせて、変化しつつある。そのことは、記念空間の歴史からもうかがうことができた。日本関連の記念物の多くは、1930-1940 年代に日中戦争に関連して中国各地で作られたが、そのほとんどが「為国犠牲」、「抗日陣亡」といった碑銘に現れるように、国民の団結、国土防衛の抗日ナショナリズムの表象である。こうした記念物は、1950―1980 年の間に、放置され毀損されたものが多い。中国共産党政権は反国民党という政治的イデオロギーに基づき、「民族解放」より「階級闘争」の論理を優先させ、国民党政府時代に「抗日の英雄」として顕彰された一部の軍人に、国共内戦中において、共産党に敵対した「反共」・「反人民」というレッテルを貼り、彼らに関連する記念物を毀損したり、揮毫を削ったりしたのである。日中戦争の記憶の一部はこのようにして抹消された。1980 年代以後、改革開放路線によって、共産党と台湾国民党との関係は緩和され、「中華民族」というスローガンで団結するという動きがでてきた。中国共産党政府は、国

民党の日中戦争時代の功績を再評価し、中国の統一に繋げようとする政治的目的で、国民党政府時代の記念物を修復することにした。一方、1980 年代以降、日中関係において、靖国神社参拝問題、教科書問題などの歴史認識の対立が顕在化した。こうした歴史的背景の下で、中国政府が日中戦争に関連する記念物の保存、修復、整備を推進したことは、新たな日中関係における問題に対応するためだったともいえる。このように、国民党政府時代、毛沢東時代、鄧小平時代にわたって、中国のナショナリズムは常に日本に対する意識と繋がっているのが特徴である。南京にある「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」の設立及び二回の増改築にも、中国の対日政策の変化にも伺える。つまり、記憶は過去に属するのではなく、現在に属しているのである。

（２）日本と中国は戦争記憶をめぐる対立を乗り越えるには、共通の記憶空間を建設することが重要である。

中国の日本関連の記念物は、日中戦争関係のもの以外に、東北の金州にある正岡子規の詩碑、唐山にある日中友好記念碑、広西の西南反戦同盟支部の遺跡など、文化交流、中国建設の支援、侵略戦争反対などの多くのジャンルの記念物が存在している。つまり、中国の公共記憶空間における日本関連の記念物は、戦争における「加害」と「被害」という構図だけにとどまらない部分も多く存在している。また、瀋陽の九一八歴史博物館、南京の「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」のような「加害」の記念物の中で、日本人の手で立てられた反戦記念碑、謝罪碑などの展示も存在し、それらは見学する中国人に対して、日本人のもうひとつの戦争認識を示している。これらの記念物の存在状況と、それらが中国人の日本観へ良い影響を与える点をふまえ、本研究では日本と中国が「和解」へ向かって共通の歴史記憶を構築できる可能性について明らかにした。

（３）本研究は、一国史を越える比較表象論的な研究の基礎作業としても位置づけられる。日本では、靖国神社、広島平和祈念公園から、慰霊碑、忠魂碑などの地方レベルの歴史表象に至るまで、ナショナリズム形成との関係についての研究が十数年来盛んに行われ多くの蓄積がある。檜山幸夫氏のグループが推進してきた基盤研究Ａ・「近代日本における戦争記念碑と戦没者慰霊についての地域社会史的研究」は、日本の戦争記念碑の研究調査に当たって、中国のそれをも調査する必要性を指摘し、「中国における対日靖国問題に対する問題理解には、中国社会における抗日記念碑・烈士慰霊の強い政治性を理解することが必要である」とする。また伊香俊哉氏は、中国雲南省の最西部において、戦争遺跡、戦争記念碑に刻まれた日本軍による戦争被害の記憶と、現地を訪れた日本の戦友会や遺族会の戦争の記憶のあり方とを対比させ、戦争の記憶をめぐる両者の相剋の実相を明らかにしたうえ、両者が「和解」するには、日本側が中国の戦争記憶を十分理解する必要があると指摘している。本研究では、中国人の戦争記憶の特徴を明らにすることによって、日本と中国の戦争記憶を比較する際の、中国側の事例を提供した。また、これらの事例は、アメリカやドイツなどの欧米記念碑文化との比較研究にも貢献できるであろう。

（4）中国近現代史・中国思想史の研究に対する民俗学・人類学的な貢献がある。従来の中国近現代史、思想史研究は、伝統的に文献資料を主な資料として用いており、記念碑、記念館の日常生活における役割を分析するような学問が、未だ発達してない。日本の中国研究においては、石造記念物、記念館などの文化的、思想的な意義を調査・分析することの重要性が次第に認識され、個別の研究成果があるが、本格的な研究調査は行われていない。本研究はフィールドワークを行い、民衆の日常生活レベルにおける「記念空間」や「記念行為」の思想性を分析することを試みた。これは従来研究の空白を全て埋めるには至らないが、今後の研究を促進する先駆的な役割を果たす研究であると考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計６件）

王　暁葵　日本的戦争記憶―以戦争記念碑為例、『文化自覚与人文東亜：中日文化研究新探』，査読無、人民出版社、2013、329-339
王　暁葵　記憶研究的可能性　『学術月刊』第 44 巻７月号　査読有　2012　128－132
王　暁葵　戦争体験はどのように伝承されるのか―月嶺村の聞き取り調査中間報告、『比較民俗研究』27 号　査読無、2012、166－173
王　暁葵　記憶論与民俗学、『民俗研究』（第２期）、査読有、2011、28－40
王　暁葵　広西会戦的記録与記憶―記念碑和遺跡為中心、『抗日文化研究』第 5 期、査読無、2011、266－287
王　暁葵　遺骨のゆくえ―中国における戦争、災害、事件の死者をめぐって、『民俗文化研究』査読無、第 11 号、2011、65－78

〔学会発表〕（計９件）

王　暁葵　中国における日本イメージの形成及びその特徴―月嶺村を例にして」招待講演、神奈川大学歴史民俗資料学研究科、2012 年 5 月 25 日、 神奈川県横浜市
王　暁葵 日本の戦争記憶―南京大虐殺を中

心に、南京大学人文社会科学高級研究院、2013年３月17日、中国江蘇省南京市
王　暁葵　方法としての記憶－日中戦争における記憶の比較研究（招待講演）、広西抗戦文化研究会、2011年12月13日、中国広西省桂林市
王　暁葵　都市空間における遺跡－戦争と災害を中心に、中国人文社会科学重点研究基地中国現代都市研究センター・華東師範大学社会発展学院、2011年10月21日、中国上海市
王　暁葵　南京大虐殺記念館における中国の文化政策、アジア・グローバル・カルチュラル・フォーラム（ＡＧＣＦ）2010年12月20日、香港大学、香港
王　暁葵　日本の戦争記憶問題について（招待講演）、華東師範大学社会発展学院、2010年11月18日　中国上海市
王　暁葵　記憶研究と民俗学について、山東大學文史哲研究院 、2010年11月14日、中国山東省済南市
王　暁葵　都市空間の形成及び文化記憶について、中山大學大學中文系、中国非物質文化研究センター、『文芸研究』編集部、2010年９月２日、中国広東省広州市
王　暁葵 日本の戦争記憶について、南京大学人文社会高級研究院、2010年８月20日、中国江蘇省南京市

〔図書〕（計１件）
　王暁葵　民俗学与現代社会　上海文芸出版社　2011年12月　313頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：
〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1) 研究代表者　王　暁葵
(WANG XIAOKUI)
愛知県立大学外国語学部
研究者番号：80423848

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：